

留学前報告書 (2016年6月)

Funai Overseas Scholarship 2016年度 奨学生 今里 和樹

1. はじめに

この夏から Northwestern University, Materials Science and Engineering Ph.D. program に進学することになりました。運よく船井財団様から奨学金をいただける運びとなりまして、このレポートを書かせていただいております。第一回のレポートとして学位留学に至った経緯と反省について書いていきたいと思います。学位留学について少しでも興味を持ってくれた人に参考になる内容があれば幸いです。学位留学に関する一般的な情報はググればわかることも多いので、なるべく自分の経験を具体的に書いていこうと思います。

2. 留学に至った経緯

昔から新しいこと好きで、何事もやってみないと気が済まない性格だったと思います。こういうと聞こえはいいですがただ飽きっぽい性格なだけかもしれません。中学では吹奏楽、高校でラグビー、大学でストリートダンスをやるという訳のわからない選択をしてきました。しかし、その選択がことごとく面白い経験につながりました。充実した日々と幅広い経験、ある程度の成功体験が物事への挑戦心をさらに強めたのだと思います。そんな私の前に海外大学院での学位取得という選択肢が現れれば、それを選択するのは自然な流れだったのかもしれませんが、この決定を下すまでには様々な出来事が積み重なっていて、また、私の場合は大きな一つのきっかけがあった訳でもありません。最後の最後まで迷いながら決断を下す中で、大きな流れとして学位留学という道を選びました。



図1 Northwestern University のゲートウェイアーチ

学部時代 初めて学位留学という選択肢を知ったのは学部3年の冬に行われた学位留学説明会でした。週7日ダンス漬けの大学生活を謳歌しながらも新しい挑戦を渴望していた私は、未知で、何となくすごそうな進路の存在に惹かれました。昔から英語が苦手科目筆頭だった私はまず TOEFL の勉強を始め（最終的に10回くらい受けました）、ネットで学位留学に関する情報を検索する毎日を送り、受験を目指していました。しかし、4月から早くもその生活は一変します。研究室配属です。初めて本物の研究に触れ、論理的な文章の書き方からものごとのとらえ方まで様々なことを考えさせられる生活でした。この経験はまだ留学を考える前にたくさんのやるべきことがあるという事実を私の前にたたきつけ、B4の夏を過ぎた頃には学位留学という選択肢は完全に薄れてしまいました。この時の留学への思いはかつこいなとか、お金をもらいながら勉強できるなんていいくらいの浅い考えからくる憧れだったのだと思います。こうして学部時代の海外大学院受験はいとも簡単に幕を下ろしました。

修士入学後 その後、慶應の修士課程に進学し、研究に没頭します。この頃はまた昔のように就職するものだと思っていましたし、実際にM2のときには就活をして、内定もいただきました。しかし、研究をやればやるほど、基本原理に基づいて物事を考える楽しさと自由を持つ研究活動が魅力的に思え、研究に存分に取り組める道があるのであれば、行けるところまで行ってみたいと考えるようになりました。そうすると、このタイミングで一時期あきらめた学位留学という選択肢がもう一度よみがえってきます。研究も波に乗ってきた時期でもありましたし、慣れ親しんだ日本で博士課程に進学するのと、学位留学というリスクに挑戦するという選択肢で本当に迷いました。しかし、合格するかどうかはわからない時点で迷っていてもしょうがない、世界から集まる人材の中で切磋琢磨しあうことが自分の成長につながるという謎の確信のもと、海外大学院受験への道を進むことを決断しました。正直、秋頃は修論（とダンスの公演笑）で出願さえ厳しいのではないかと思うこともありましたが、周りの人の存在と、奨学金への合格で、何とか持ちこたえ、最終的に合格を勝ち取ることができました。

決して最初から“絶対に留学する”という思いを持っていたわけではありませんでしたが、それぞれの場面で自分なりに考えた上で行動した結果、運よく留学への道が開けたようなものです。たとえば奨学金に受からなかったら、志望校に合格できなかったら、就職していたかもしれません。修士卒で行くことに関して、学部卒の方が近道だという人がいるかもしれませんが、この2年、日本で学んだ研究に限らない物事の考え方は本当にいい財産になったと自信をもっていえますので、その辺は流れに身を任せてもいいのかなと思います。

3. 進路が決まって

進学先も決定し少し落ち着いたところで自分なりに受験のプロセスについて振り返ってみました。最終的な合格のファクターは決してわかりませんが、修士の学生として僕の合格に大きく寄与したのは論文と奨学金だと思います。まあ、この奨学金の選考課程においてもやはり研究成果が重視されているので結局今自分が携わっている研究に打ち込むことが一番なのでしょう。ただ、研究をやれば合格できるわけではないので受験に際し、いくつか意識していたことを書いてみます。

戦略的な準備 アメリカの大学院受験はいくつかのテストで何点以上取ればよいというものではなく、書類の締め切り日までに様々な選考材料の質を上げていかなければなりません。限られた時間の中で戦略を立て、取捨選択を行いながら自分の強みを生かしたアピールをする必要があります。これこそ個人によるもので、私の場合は運良く出版できた論文という結果をベースに進めることができました。簡単に言うと論文を持っていると教授からの返信率が高くなり、コミュニケーションが取りやすくなる。メールでのやりとりがうまくいくと興味のある先生の研究室を訪問することができる。そのとき印象のよかった先生に簡単な推薦コメントを書いていただくことで奨学金の選考で留学先との接触の強さを評価していただく。そして最終的には船井奨学金への合格が進学への扉を開きました。その出発点は学会での出会いかもしれませんし、共同研究かもしれませんし、人それぞれです。現時点での自分の強みを使って目標を達成する

可能性を上げるのに最善と思われる手を順番に打っていくというイメージをもって、合格のために戦略的に動くようにしていました。

提出書類の意味 選考プロセスが主に書類のみで行われるということはその書類が自分自身を表現するすべてです。英語での慣れない書類作成ですので形式的にすべての素材をそろえることに精一杯になってしまいがちですが、3通の推薦状、SOP、テストのスコア一つ一つが持つ意味、それぞれの結びつきを考えて準備をしました。たとえば、TOEFLがそこまで高くなければ、推薦状の一通は海外の先生に英語能力を中心に書いてもらうとか、指導教官からの推薦状はSOPのストーリーとリンクさせて説得力を出すなどです。すべての審査材料が同じベクトルで自分を表現することで人物像がより明確になり、選考委員に印象づけられるのではないのでしょうか。

縁 どれだけ準備してもその年の受験者に化け物みたいなインド人とかがいれば例年では受かっていたレベルの子が落ちるのはもうどうしようもないことです。私も今年の留学生の枠が減ってしまったことが理由となり、かなり手ごたえが良く、先生とのコンタクトもうまくいっていた学校が不合格になりました。一方、合格した学校に Visiting で行った際には“日本人を採りたかったんだよね”といった直接合否に関わるような話もききました。受かる受からないにも縁が作用する部分が少なからずあるということを実感したので、今後受験を考えている方は、行きたい学校には迷わずアプライしてみるのが良いのではないのでしょうか。自分の意図しないところからチャンスが回ってくることもあると思います。やれることをやれるだけやって縁がめぐってくるのを待つ、縁を巡ってこさせるくらいのつもりで取り組んでほしいです。



図2 エバンストンキャンパス内

4. 終わりに

いろいろ書いてきましたが大事なことはやるべきかどうか迷ったらとりあえずやってみることだと思います。動いてみて初めてわかることもあるし、なんか違うと思ったらやめればいいだけです。僕も向こうの先生への連絡、先輩への質問、大学訪問、相手の迷惑になるかもしれないと迷うことも多々ありました。でもどうせ相手が興味を持たなければ無視されるだけなのでとりあえずやってみて、返事が来なくてもそんなもんなので気にしなければいいこと。出願までこぎ着けるだけでもかなり手間がかかることなので、本気でなければ学部時代の僕みたいに自然とあきらめてしまうものだと思います。逆に、努力の結果たどり着いた道が本当にやりたいこと、やるべきことであるのだろうとも思います。ただ、盲目的にみんなと一緒に就活をするだけじゃなくて、学位留学など他の選択肢を知った上で自ら結論を出すのが大切なのではないのでしょうか。

偉そうにこんな文章を書かせていただいている自分もまだスタートラインにも立っていないし、本番はこれからです。ここまで自分を支えてくれた多くの人たちへの感謝を忘れず、新天地でこれからも挑戦し続けようと思います。